



# 空と水

佐藤 昌一郎

去年の夏、東京から熊本に転勤してきたとき、私は空と水の美しさに心をうたれた。

地元の人達は、「熊本は暑くて大変でしょう」とか「いなかの街は不便でしょう」とか、私を説いてくれたが、私にとって青い空ときれいな水は、ただただ珍らしく、貴重だった。

そういえば、底の見える海を見たのも久しぶりだった。

だから、挨拶状にはこう付記した。

「熊本は空が青いぞ。それに近くの川と湖の水が澄んでいて、底が見えるんだ」

こんな手紙を見て、何人かの友人がわざわざ東京からやって来た。

空と水を見に来たのである。

だが、最近の熊本は遠来の人の期待を裏切ることも多くなってしまったらしい。

健康の空港ビルで、ある友人は暑くて青い空を見あげてごきげんだった。

「どうだ、おれの手紙は本当だろう」

私は、すっかり得意になって、今度は豊富な水の流れを見せてやることを思い

ついた。だから体育館の前で急にタクシを止めて友人を無理に降ろし、橋の上で引っぱって行ったことがある。ところが、どうしたのか、その日は水前寺公園の方からかなりのゴミが流れていた。

川底もよごれていた。

私はがっかりして公園に案内するのをお願いとどまったことを忘れることができない。

こんなこともあった。

やはり東京から空と水を見物に来た友人を案内して熊本城に登った時のことである。

私は石垣が好きだから、熊本城に案内するときは、たいてい桜橋で下車して石垣の道を本丸に登るのだが、その時は入城の前に坪井川の水をきれいにするべく指摘されたのである。

坪井川の水については、私も毎日気にしながら通動しているのだが、その他にも、江津湖にしても白川にしても、最近急に川の水がひどくなってゆくように思われるのは私の気のせいだろうか。

なにかも全部清掃するのは大変だろうが、せつかくの美しい川や湖が次第に醜くなってゆくのは胸が痛む。黙っていないで、だれか声を出した方がよいのではないかと……と考えたのである。

さいわい私は職業がいろいろな人にお会いする機会に恵まれている。この特権(?)を精一杯利用してみようと思いついた。

仕事の話がすむと、早速空と水の話をもち出し、熊本の青空と清水が、いかに貴重な財産であるかを、さりげなく話題にするのだ。そして、こう持ち掛ける。

「どうです? 熊本の川をきれいにする運動でもやりませんか」

ある時は茶のみ話の程度に、ある時は冗談めかして、ある時は真剣に提案するのである。

相手が地元有力者の場合は好都合だ。私もマスコミの一員だから直接話法できりこむ。

反対する人は殆んどないが、積極的な人、消極的な人、反応はさまざまである。

この提案、今後どう展開するかかわらないし、賛成者が多いからといって具体的な運動が盛り上がるかどうかはわからない。

それにしても……と私は考える。

長く地元にいると、つい馴れてしまふけれども、熊本の空と水は本当に貴重なのである。だから現状より悪くしてはいけぬ。

いまよりもっと美しくすれば、それにしたことはないけれども、せめて現状維持ぐらいはしなければいけないのではないか。

よそ者なるがゆえに、私はなおさら四万都市の青空と水の尊さを知っているように思うし、だからこそ大声でおせつかいをやきたくなるのである。

(前NHK熊本中央放送局・放送部主管)

## 嫁と姑

四宮 朝子

ことしの梅雨空はうっとうしい毎日が続いたが、私のところに持ちこまれる問題はそれよりもなおとじめじめとしてやりきれないのが多い。とり分け嫁と姑のトラブルほど女の性(さが)のあさましさ

をむき出しにしているものはないと、悲しい気持ちにさせられてしまうのである。

一年ほど前から始終訪ねて来るTさんは七十三歳、有能で温和な息子とその嫁、孫二人の家族と同居している。近隣の噂では、Tさんも亡夫の年金をもち裕福な樂居の身分だとか、いつもさっぱりとした服装で手にしたローケツ染の袋なども本皮の高価なものである。はた目には何と自由なし、しあわせそうなのTさんは一寸しきつかけで知り合った私にいろいろと相談をかけたて来るようになった。老人は過去のことを聞いてもらうことが大好きだがTさんも多分にもれない。多忙の時一時間も座りこまれると本当は迷惑だが、姑を遠い故郷に持つ私はせめてもの心やりと思ひ、努めて暖かい迎へ入れることにしていた。娘時代のことを、嫁入りからの生活、子供を育てる苦労、戦災に遭った時のこと、三人の息子と嫁入りした二人の娘のそれぞれの家庭の事情など、こまごまとすっかり聞かされて了った。

それで判ったことはTさんはとても頭が良く働かざるを得ないやり手であったこと、息子が成功しているのもTさんの働きがあったればこそなのに息子もその働きも少しも感謝してない。そのことを常々不満に思っていることなどであった。初めは自慢話であったが度重なるにつれ打明話となり、悪口と発展しても余りしかなかった頃、うちに来て嫁を説教してくれと云い出したのである。これは困ったと思ったが、もごとは両方きかねければ真相は判らないことだし、きかばお嫁さんも長女と同年代だし、まあまあと手軽な気持ちで手製のケーキなど持って出かけたのだ。

なるほど家の中はきちんと片付いてい

では貴方がたもそんな目に遭わないとは誰もいいたくないでしょう……と。二人ともシーンとなってしまったけれど、決して根本的な解決ではないので、これからさきどうしたらよいか。しばらく入院でもして治療した方がよいのではないかと思いつけれど家の体面などとはわかれると思つてもまた困難なことである。このような嫁と姑の問題は何時になら解決が出来るのであろうか、これは全ての女性に与えられた大きな課題ではないかと思つた。

(民生委員)

## 「お布施」あれこれ

高千穂 正史

「お布施の『定価表』をつくるべきですよ」

年寄りが亡くなって、残った若い者だけで葬式を出した時など、一番困るのは「お寺さんにや、どきやんすつとよかっだろうか」ということらしい。

塩月弥栄子さんの「冠婚葬祭入門」がよく売れているという。

こちらには影響が大きいので、早速買ってきて、そのところを読んでみる

「規定があればそれにしがたがいます

布施は、梵語では「ダーナ」という。

「いくら」したらよいかということより

も、私は「お布施とは何か」ということ

旦那さん、檀那寺などのダンナはこれを音訳したも。

ダーナとは、もともと仏教の大切な六つの修行のひとつなのである。

布施の行(ぎょう)とは、捧げ、与え、ほどこしていく行で、法施、財施、無畏施(むいせ)などがある。

法施は、出家(僧)が、説経や説法で真実の教えを施すこと。

財施は、在家者がお金などを施すこと。

無畏施は、ひとびとから不安の心を取り除き、真実の勇氣を施すことで、仏さまのなせる布施。

その他に、お釈迦さんは「無財の七施」を説いて、笑顔や、心のこもった言葉なども、立派なお布施であるという。

一般に、お布施とは、坊さんにお経を讀んで貰った「お札」と思っているから、その額についているいろと心配が出てくるわけである。

布施が修行のひとつということになると、多いとか少ないとかいう論議は出てこないはず。

僧侶は、真剣に経を讀み、命を捧げて法を説く法施の生活をすべきだし、在家の人には、葬式や仏事を縁として、財施という修行をさせて貰わねばならないということになる。

それでもなお、額が知りたいという人には

「ほどこしというのだから、お布施はほどを越すほどに」

というイキナ言葉をご紹介しましょう。

(仏蔵寺住職)